

〈第30回学会大会 講演録〉

日本人とレジャー

井上 ひさし*

平成12年度の学会大会は、平成12年11月25日(土)と26日(日)の二日間にわたり、明治大学駿河台キャンパスにて開催されました。「第30回記念大会」と銘打たれたこのたびの学会大会は、大会実行委員長の寺島善一明治大学教授のご尽力により、井上ひさし氏の講演会をもって開幕しました。この講演会は、明治大学の協賛を得て、本学会の社会貢献活動の一環として一般公開されました。

講演会場となった、明治大学で最も収容人数が大きいと思われる「リパティホール1013教室」は、人気作家の講演を聴こうと集まった一般聴衆でほとんど埋め尽くされました。後日、この講演を聴くことのできなかった遠方の学会員らを中心に、資料請求の問い合わせや機関誌への掲載要望が少なからず寄せられました。

劇作も多数手がけられている山形県出身の井上ひさし先生において、その話しぶりにみられる独特の間の取り方や抑揚や響きなど、発声された言葉が奏でる愉快的調子全体を文面に再現することなどおおよそ不可能です。ましてや、考えに考え抜いて言葉を織り成して作品に仕上げていく作家という立場の苦心を慮ると、講演録とはいえども活字となって後世に残るものです。恐れながら試みた厚かましい依頼にもかかわらず、それを暖かく受けとめて下さった井上事務所の渡辺昭夫氏のご協力をえて、こうしてここに講演録を掲載でき嬉しく思います。

なお、井上ひさし氏の略歴については、大会実行委員会によって当日配布された印刷物に掲載されたものを以下のとおり転載させていただきました。(編集委員会)

*小説家・劇作家。劇団こまつ座文芸部。

1934年11月16日、山形県東置賜郡川西町(旧小松町)に生まれる。1960年、上智大学外国語学部フランス語学科卒業。放送作家として「ひょっこりひょうたん島」(共作)をはじめ、数多くのテレビ台本を手がける。小説に「手鎖心中」(第67回直木賞受賞)、「吉里吉里人」(日本SF大賞受賞)、「不忠臣蔵」、「腹鼓記」、「ナイン」、「四千万歩の男」、「東京セブンローズ」など。戯曲に「井上ひさし全芝居」ほか。エッセイに「井上ひさしエッセイ集」。他に農業問題、憲法問題、日本語問題、平和問題等に関しても精力的に執筆活動を展開している。

1987年には、13万冊を超える蔵書を山形県川西町に寄贈し、図書館「遅筆堂文庫」が開館される。この文庫を拠点に、88年から毎年「生活者大学校」を開講している。

私とレジャー

私が「レジャー」という言葉に最初に出会ったのは、昭和26年（1951年）のことです。その時、レジャーセンターという、当時としては大変巨大な建物が出来ました。こけら落としに美空ひばりショーと長谷川一夫ショーというのを見たんですが、もう取り壊しましたけど、大変巨大な建物で、びっくりした覚えがあります。その時初めてレジャーという言葉に出会ったんですね。

色々意味を聞きますと、つまり余暇といますか、暇といますか、暇な時に自由時間を楽しむ、そういうセンターであるという説明を聞きました。私は、あるいは私と同年代の少年たちは本当にびっくりしたと思います。

といますのは、ちょうどその6年前の昭和20年（1945年）の暮れは、例えば上野では1日平均6人の餓死者が出てたんですね。

次の年の昭和21年（1946年）には、6月に、官庁が1ヵ月に10日間食糧休暇というのを設けました。これはどういう休暇かといいますと、1ヵ月の間の10日間は闇の食糧を買い出しに行くのを職員に認めるというものです。大変食料難のひどい時代だったわけです。

それから、同じ6月くらいに、東京郵便局が丸の内にありますが、大量欠勤で業務停止という大変な事件が起きました。これは職員の方がみんな休みまして、食糧を千葉とか神奈川とか埼玉の方へ買い出しに行ったのです。そんなひどい時代からまだ6年しか経ってませんので、このレジャーセンターという施設、つまり遊ぶための暇をうまく過ごすための巨大な施設が出来たというのに、非常に奇異の感に打たれたことを覚えてます。

その後、レジャーブームというのが起きました。だいたい10年後ですね。

昭和36年（1961年）の自由国民社の流行語のトップに出てくるのが、レジャーブームです。戦争が終わってまだ15、6年の間にここまで世の中は変わってしまうのか、ということで、ずーっとびっくり仰天が続いておりました。

みなさん専門家の先生方ですから、これから申し上げることは先刻ご承知ということばかりだと思います。ただ、そうでない方もいらっしゃると思いますので、専門家といますか、これを専門に研究なさっている先生方

には申し訳ないのですが、非常に初歩的な、私の余暇ということについて、ちょっと調べたり考えたりしてきたことを申し上げます。

「余暇」という言葉が日本語に初めて誕生したのが、私が調べた限りでは、大正の12年（1923年）です。もっと遡れるかもしれませんが、大阪府の社会教育課が、「余暇生活の研究」という調査報告書を出しました。私の狭い調べの中ではこれが初出です。余暇という言葉が最初に出た例です。これが当たってるかどうかはわかりません。専門的に調べると、もっと更に前にこの言葉はあるのかもしれませんが、私が見た限りでは、これがいちばん遡れます。いちばん古い、はっきり余暇と余暇生活の研究です。大阪府の社会教育課が、当時の、今でいえば普通の庶民の自由時間の過ごし方を調査して、それを報告したわけです。

結論が非常に面白くて、ギリシャもローマも余暇の使い方を間違えたから滅びたというのです。だから余暇を持ち過ぎてはいけない、余暇はクリエイティブのためにあるというのです。

やっぱり、役所ってというのは、大正時代から横文字を使うのが好きですね。— create again — つまり、余暇は明日の労働の活力となるような健全なものでなくてはならんと。労働力の再生産のために、余暇はあるそうです。ちょうど、おりしも日本は中工業、軽工業を卒業して、日露戦争辺りから段々と重工業が起きてきました。重工業化している最中ですから、そういう労働力のために、おそらくこういう調査も行われたんじゃないかと思いますが、いずれにせよ、そのあまり余暇とって、よか気持ちになってはいかん、（笑）と。余暇をただ遊んでいると、ギリシャ、ローマのように滅びてしまうよ、という、そういうのが結論ですね。

そうしますと、なんか余暇善導といますか、余暇を誰かが、お上が善く導いていくということになります。もちろん「小人閑居して不善を為す」と言い、普通の人間が暇があるとたいてい悪いことしかしない、という中国の教えも一緒にありまして、どうもずーっと、余暇に対しては日本人というものはかなり後ろめたい気持ちを持っていたと言えます。一例しか出さずに結論するのは乱暴で、3つくらい出さなきゃいけないんですけど、私は素人ですからこの一例だけでも……どうも日本人というものは余暇といますか、自由時間をあまり喜んでいないと、誰かの指導で暇な時間を

過ぐすと考えている様です。

しかし、あまり暇があってはいけないというか、なんとはいかに、余暇に対しては後ろめたい気持ちを持っている人々が我々日本人ではなかったか、という結論を早くも下したわけです。

ただ、研修旅行とか、調査旅行という、みんな行くんです。ただの旅行は、なかなかみんな行きにくいみたいですね。研修旅行とか調査旅行とか、学会のための旅行という風に、ただの旅行じゃだめなんですね。何か勉強しているとか、そういうことがないと、今でもなかなか休めませんし、有給休暇をなかなか日本人は取らない、取れないというのはみなさんご存知の通りです。

それからよく私たちが言う、「いや〜、つき合いで遊んじゃった。」という……自分は遊びたくないんですよ。でも、ほんとは遊びたいんですけど、(笑)。ただ、遊んできたという、どうも外聞きが悪いと。ですから、「つき合いで」というのをつけるわけなんです。

これを私なりに勝手に言いますと、どうも日本人というのはどうやら誉められたいんですよ。誉められたい主義が、私たちにはどうもあるらしい。

例えば、私は18歳くらいで高校を卒業してから、ちょっと大学へ行ったんですけど、半年くらいで休学しまして、国立釜石療養所の事務方になったわけです。これ、国家公務員です。いろんな療養所が当時たくさんありました。私の上司の庶務係長は、とにかく超過勤務を取ろうという人でした。ですから、仕事が始まるのが午後3時くらいなんです。それまで新聞読んだり、アマダくじでお菓子買ってきてみんなでお茶飲んだりしていました。いよいよ仕事が始めるのが午後3時で、必死でやると3時間で終わるんです。僕らとしては、朝の8時半に療養所に入るわけですけど、そこで必死になってやればお昼には全部済んでしまうんです。我々若い衆にとっては、午後すぐ帰れる方がいいわけですけど、彼は、官舎が側にあります。歩いて30秒くらいの所ですから、子供が「ご飯出来たよー。」と言うまで超過勤務をやって、下駄履いて30秒で家へ帰って、晩酌なんか始めて、ちょうど夕ご飯ができるまで働くんですが、これは名人級でした。我々はそこから延々1時間かかって家に帰るわけですけど超過勤務をうんと付けながら、当管内の療養所では突出してはいけません。つまり、目立ってはいけませんけれど、

ある幅の中では最高の超過勤務を取ろうというのですね。それが、つまり庶務係長の腕なんですね。私は、もう、ここには長くは住めないと思いました(笑)。というのは、休めるのに休まない。極端に休みを取ると周りがうるさい。という、なんか微妙なところで、つまりこれから生きて行くのはどうも苦手だな、というので、わたしは2年ちょっとでやめたのです。

この「誉められたい主義」。逆に言いますと、「他人の眼差し恐怖症」というやつですね。ある幅の中では、最大限のことをやるんですが、ちょっと出過ぎると、他人の目を非常に恐れている。これを普通に言いますと、人並み主義、横並び主義です。でもその横並びの中で、ちょっとみんなに注意がきかないようにちょっと出る、という、この微妙なところが上手な人がどんどん出世して行くわけです(笑)。

この誉められたい主義というのは、どうも今、全盛のようです。ブランド物もそうですよね。「あ、ちょっといい物持っているわね。」と、ルイ・ヴィトンだとか、何かを誰か持っていて、それをみんなで誉めている内に、今度は、横並び、人並み主義が出てきて、みんな持ってしまうということです。巨人ファンがなぜ多いかというのは、これで解けるんですよ。つまり誉められたいんですよ。強いところに。今年の巨人軍なんか、もう乗ってしまえば絶対安全ですよ。もう、優勝するに決まっていますから。そうやって、「いや〜、巨人ファンでね、優勝しちゃったよ!」「良かったですね!」っていう風にちょっと言ってもらいたい(笑)。

それから、最近顕著になってきたのは日本中が全部勝者に乗ってしまうということです。勝ち馬に乗ってしまう。力の弱い、どうもあんまり上手じゃないっていう人が最初に好きで、それがズーッと負けて悔しいけど、そのままひいきにしていこうというのがどうも苦手になって、すぐ、バーン!と勝った人に、もう、みんなに乗ってしまう。誰もかれも大騒ぎで勝った人に乗ってしまうという、その構造というのは、どうもあんまり好きではありません。

例えば、いつか「ティラミスブーム」というのがありましたよね?あれはイタリアのベネト州というベネスの近所に……日本でいうと山形県とか、秋田県だとかあって、その県都というのが、トレヴィーゾという所ですけど、トレヴィーゾの郷土菓子なんですよ。日本人が行って、あんまりおいしいんで、日本で

作ったらどうだろう？とって作って、たった1年でしたけど、メチャクチャ流行りましたよね。

「ティラミス」というのは、イタリア語をご存知の方はお分かりでしょうが、「ティラ」というのは「引く」、「ミー」は「自分」で、「ス」は「上へ」です。だから「上へ引き上げのお菓子」ですから、おいしくて元気が出るという、そういう郷土菓子なんです。それが、日本でバーン！と当たったというのは、「あれ、食べた？」と言うと、「いや、食べてない。」「いや、美味しいよ。」と言って誉められたいというか、「あー、あの人はなんか随分世の中に通じてる。」と思われたいのです。結局これは、逆に考えるとすごくわかり易いんですけど、ミラノとかローマのオフィス街で、イタリア娘があるとき突然「ずんだ餅っていうのは美味しいよ。」というので（笑）、東北の宮城か山形の郷土のぼた餅に青豆を半分つぶして砂糖入れてまぶしたやつを「これ、美味しい！」ってローマかミラノへ持って行って売り出したらイタリアの娘たちが行列して、「ズンダモチ！ズンダモチ！」と言うのは（笑）、これおかしいでしょう？

それから、今ワインブームでしょう？これもよく考えるとおかしいんですよ。

パリジャンか、パリジェンヌが、パリの住人……パリのお嬢さんが、酒を飲みながら「これは越乃寒梅の…。」と、言うと思います？「これは吟醸で。」とか（笑）。日本人は平気でボジョレーヌーボーはどうだとか、やたら妙に詳しいんですよ。これは結局知識を誉められたくて、みんなそれを勉強していく……。パルメザンチーズなんて、イタリアでも聞いたこともないイタリア人がいるんですけど、日本人はたいてい知ってますよね。そういう風になんか知識を誇る、誰かからとか誉められたいという、そういう性癖がどうも……。これは全部レジャーに関係してきますから（笑）。どうも、その辺が私ちょっと分からなくなっているんですよ。「日本人でなんだろう？」と。自分も含めて置き換えてみると、全然ナンセンスなことを日本人は必死になってやっているという。この精神構造というのは、どいういうものかというのが、ちょっとよく分らないのです。

それから、日本人の旅行者に多くて、イタリアのウェイターがみんな泣いているのは、ちょっと半可通のワインの知識がちょっとある人があるときです。グループで日本人があるレストランに入りますよね、そうす

ると、そのウェイターはこの人がどうもこのグループのリーダーか、あるいはここでお金を払う金主だな、というのがすぐ分かるわけです。それで、その人の所へ葡萄酒の注文がくると、栓を抜いて味見させるでしょ？そうすると、なまじっか変な知識があるんで「あ、これダメだ。」とか言うわけですよ。するとね、それ全部ウェイターがもつんです。つまりウェイターは、責任持ってワインを選んでるわけです。1年に1本くらいだそう。開ける時にヘタクソでコルクの粉が入ったりする場合、これウェイターがそういうヘマをやったら、これ自分で自己負担で新しいのを出さなきゃいけないですから、あとはみんな吟味して出すわけです。それを、ちょっと知ったかぶりの日本人がいて、女性なんかいるといいとこ見せようとして、「うーん、これ、ちょっとだな。」って言う、これ反抗できないですから、それを下げて新しいのを持ってくる。この下げたやつはウェイターがもつんです。だから日本の観光客の知ったかぶりは困る、という、イタリアウェイター会の秘密かな（笑）……。なんだろうと思います。こういう……その、つまり新しいもの好きといいますか、ちょっと知識を誇りたい、自分の持っているものをちょっと誇ってみたい、誉められたい、っていう。

外国人が来ると「日本どうでした？」と聞きます。はっきり言ったらみんな怒り出しますが、なんか向こうがちょっと誉めたりするとなんかそれで安心して、「うん」なんていうことになるそのところ辺りはね。ちょっと……。これ「レジャー」に後々関係してくるんです（笑）。

日本・日本人のレジャーに関する諸問題

大正の12年（1923年）辺りの大阪府の調べの様に、余暇というのはたいたものではない、簡単に余暇なんか取って遊んでいると、日本の国は滅ぶ、というのは違うことか、最近では段々と分かってきまして、労働時間が少なくなって、生活水準が上がると教えられています。この辺はみなさんよくご存知だと思いますが、余暇が多少は出来てきたのです。昭和36年（1961年）の「レジャーブーム」というのがありますし、なんかみんなで遊びに行くと、休みを取る、その休みを楽しくやるという、そういう習慣は出てきたんですが、こ

れはみなさんご存知の通りに、せっかく出来た余暇、これつまりあれでしょ？自由時間ですよ。静養時間というのがありますよね。人間寝たり、食べたり、体をきれいにしたり、そういうこと的时间・睡眠時間・労働時間、あとで詳しいケースは申し上げますけど、その間に自分の自由にできる時間を、実はレジャー産業とか、マスメディア産業に、盗まれているわけです。

あれほど競馬に夢中になる必要もないし、あれほど野球に夢中になる必要もありませんし、僕は今サッカーに夢中になっているんですけど、それほどサッカーに夢中にならなくても死なないわけですよ。それで、なんだかみんな夢中になって、自分の自由な時間をそこへつぎ込んでいく。結局せっかくできた余暇をそういうマスメディアやレジャー産業に実は盗まれていく、囲いこまれていく。ですから、本当の余暇を、我々はそのレジャー産業やマスメディア産業から守らないといけないというくらい皮肉なことになっているわけです。

ディズニーランドなんてあんなに流行ってるのに、僕一度も行ったことないんですよ。嘘っぽくて。どうせ中に人間が入っているのになんで驚くんだ、っていう。それから、『「食料の持ち込み禁止」 生意気だぞ、こんちくしょー！』ってな感じですよ（笑）。

で、まあ僕も温泉に行ったりなんかしますけど、とにかく疲れるわけですよ。人がいっぱいいますし、それから金がかかるし、帰って来たときに、なんか虚しいですよ。そうやってせっかくできた余暇をなんか大きな産業に全部支配されているという構造はこれはみなさんもうとっくにご存知だし、感じはしますが、これはちょっとおかしいんじゃないかっていう風に昨日の晩辺りに考えたわけです。みなさんの考えるのよりずっと遅いんですけどね。

それで、ちょっと計算してみました。人生80年として、時間に直すと70万飛んで、800時間ですよ。70万時間という風にしましょう。人生80年、70万時間。22歳で就職して、60歳で引退するとして、40年間働くとして仮定します。そうすると、週5日間、1日8時間働いて週40時間です。1年で2080時間、40年で8万3200時間働くわけです。ということは人生全部で70万時間ですから、8万3200百時間というのは、我々が80まで生きるとすると、人生の中の約12パーセント働いているわけです。意外に働いてないですよ。我々は人生の持ち時間の12パーセントは労働しているわけで

す。

ところがですね。この数字、私、計算してすぐ分かりましたけど、これに通勤時間が入ってないですよ。だいたい往復2時間から3時間ですよ。若い人が郊外に家を建てるだの、マンションのちょといいのを買うとなると、最近では都心にまたマンションが出来ているようですが、色々な資料を引っ張り出してみると、だいたい平均往復通勤時間……これ便宜上3時間にしたんですね。数が多い方がいいですから（笑）。

そうしますと、一生の間40年間働いていますとね、通勤時間が3万1200百時間です。

僕の知っている人がイタリア人ですけど、日本に来て何よりびっくりしたのは、「あれは、スペクタクルだ！」って言うてましたけど、朝のラッシュアワーです。「いや、これ通勤なんだよ。」って言うと、「いや、これ通勤じゃなくて、旅行だ！」って言うんですよ。往復3時間って言うと、これは通勤とはいえない、これは旅行であると。私も「あぁ、なるほどな。」って思ったんですが、いずれにせよ、その通勤時間40年間を加算していきますと、人生の5パーセントを通勤に使っているわけです。そうしますと80歳で日本は世界の長寿国というんですが、この人生の5パーセントを通勤に無駄に取られていたとして、他の国でも通勤に1時間くらいは使うとして、2時間で計算しますと、だいたい6年近く通勤時間を使っているんですね、日本人は。

80歳なんていばっている場合じゃないですよ。通勤時間が長いために、その間……色々カセット聞いて英語勉強したり、それから前の女の子のお尻ちょと撫でたりですね（笑）。嫌な思いもしながら、そこには人生がいっぱい詰まっていますけど、でもこれは自由時間じゃないですよ。なんでしょうね、牢獄みたいな時間だと僕は思います。僕は朝たまたま早起きして通勤電車に乗ったときまで、本当にサラリーマンの皆さんにもう、脱帽ですよ。よくこんな戦争みたいなことをして、会社に行って働けるもんだ。それで、友達に言ったら、「いやね、午前中は働いてないんだ。休んでるんだ。」（笑）っていうことを冗談で言った人がいますが、でもあの通勤時間を2時間にすると、一生の持ち時間の6年近く、実はあの混雑の中で、我々といひますか、給料生活者は、時間を盗まれてるわけです。ですから世界一の長寿国、人生80年なんて威張ってもしょうがないんですよ。本当は74年くらいじゃな

いかと。

まあ、段々日本人の平均寿命も縮まってきているようです。この間の調査では男女共々1年近くも短くなってきているんですよ。ですから、どうも私たちは、あの通勤時間で、大事なもう二度と来ない、一瞬一瞬が宝物みたいな、宝石のように貴重な時間を、あんなものに実は吸い取られていると。そうしてきますと、これは日本の都市構造を変えないとだめですね。

生活空間とレジャー

例えばニューヨークのブロードウェイを例に取りますと、だいたい芝居やミュージカルの開幕が早いので7時半、普通は8時ですよ。そうしますと、それを見に行く人たちは、いったん5時で会社を終わって、家へ帰ってドレスアップしたりドレスダウンしたりして(笑)、いや、ドレスダウンってあるんです。普通のカジュアルに替えてしまうとか。それから社長に会った日のサラリーマンは、そんな格好で芝居を見に行ってもしょうがないですから、家に帰ってドレスダウンしてしまうわけですよ。それで、もう一度都心に帰って来て、ちょっとお腹を……。芝居の最中でお腹が鳴ったりするとこれは苦しいですからね。真面目な芝居を2時間くらいお腹が鳴るのを抑えて見るくらい、あれほど辛い……。皆さんあんまり経験ないですか？なんで辛いのかよくわからないですけど、邪魔になるからでしょうね、自分の音が。それで気にすると鳴るんですよ、忘れようとしても鳴るので本当に困るんで、それでちょっとお腹に入れて、7時半、あるいは8時から芝居やミュージカルを見て、終わるのがだいたい10時半くらいです。そうするとブロードウェイの近所に150くらい劇場がありますが、常時開いているのはだいたい50から60ですけど、他の劇場は次のを仕込んでるわけです。劇場の周りに色々なレストランがありますから、見た人はみんないったんはレストランへ。全員というわけじゃないですけど。奥さんが家出したとかって言うんで、すぐ家へ帰らなけりゃいけない人がきつというでしょうし、全員とは言いませんが、たいていは芝居やミュージカルを見て終わったあとは食事をするわけです。そこに他の劇場へ行った友達が入って、「いや、俺達のが良かった。」「いや、こっちはつまらなかった。」と、わあわあやって、だいたいお開

きになるのが12時でしょ？

それでみんな家へ帰って、それで朝ちゃんと8時半なら8時半、9時って出勤して来るわけです。つまり都心と、自分達の住んでいる場所が非常に近いと、都市構造自体がそういう芝居を見るのに、非常に都合よく、うまく出来ているってことですよ。

日本でこれをやったら大変ですよ。新国立劇場が、新宿の向こうにあります。で、丸の内で、今日、新国立の芝居を見ると。じゃ、いったん家へ帰ってドレスアップして来よう！って言って戻って来ると、もう終わってますよね(笑)。これ、働く所と、住んでいる所があまりにも遠過ぎるために、例えば芝居好きな人が本当に芝居を楽しむということが出来ないわけですよ。それは、野球場にしても、色々な場合に当てはまりますね。

つまり私たちの持っている時間というのは、質が悪いんです。本当に質の悪い時間を我々日本人は持っているのです。

より良い住環境とレジャー

ついでですから住宅問題についてもちょっと言いますと、例えばイギリスでもドイツでも、とくに、オーストラリアは、僕ちょっと詳しいんですけど、1年いましたから、住宅の月賦はだいたい99年なんですね。99年間で払うんです。ですから、月々っていいですか、年々の払いは非常に少なくて済みます。向こうは香港だってマカオだって租借する時には99年っていう、あれがつまり99年っていうのはどういうわけか、向こうの人のある月賦を払う期間なんです。ですから三代かかって家代を払っていくわけです。それで、オーストラリアなんかもっとひどいって言うかすごくて、普通の不動産会社は絶対ローンを組めないんです。政府と組むんです。だから僕が高校を卒業します。向こうの人は無駄に大学に行きませんので、お医者さんになるとか、学者になるとか、そういう人は大学に行きますが、普通の勤めに入る人はみんな高校でいいんです。それで、高校出て…僕が18歳で高校を出たとします、それで、家が欲しいとなったら国とローン組むんです。そうすると、最低でも150坪から200坪くらいでレンガ建てのきちっとした、もちろん200年も300年ももつ、向こう地震が無いせいもありますけど、そういうのを

国とローンを組むわけです。ですから愛国心もありますし、この国つぶしてなるもんか、っていうのもあるわけです。つぶれてローンをあれしちゃった方がいい、っていうそういう考え方も（笑）あるかも知れませんが。それで、働き始めて、郵便局なら郵便局で働いて、自分は郵便制度あるいは定期貯金についてもっと勉強したいっていう人は、改めて大学に行くんですね。それで、会社でも官庁でも、大学に行く自分のところの社員の給料なんか減らしたら、これは政府が黙っていませんし、きちっと給料も払わないといけません。それで戻って来たら、ちゃんと席をもちろん用意なきゃいけないわけです。

そういう風に、家は人格の一部であるっていうことを、向こうの人はよく言うんですね。ですから自分の家をよく案内しますし、自分の家でパーティーなんかやりますけど、つまりどんな家に住んでいるか、どんなインテリアにしているか、どういう風に芝生を手入れしているか、全部その人の人格の一部になっているわけです。ですから、そうやって99年月賦で少しずつ払いながら、いい家を自分のものにする、それで、そこでの休みっていうのは、この質はいいですよ。ローンの払いに99年ですからね、何しろ。しかも日本円にして200坪くらいの、これは全然事情が違いますから一概には言えませんが、参考までに言いますと、だいたい200坪くらいでどんなに高くても1200万くらいです。それで、そこに上物が乗かって、だいたい2500万くらいになると、99年間で払うわけですから、もうほとんどもらったようなもの…そうでもないですかね？まあ、もらったに等しいくらいのお金をずーっと、自分の子供も払いますし、孫も払って、とにかく99年間で払えばいいわけです。それで、そうやって、みんなでそういう制度を作ってみんなが家をちゃんと持てるようにして、そこで出てくる時間というのは、これは非常に上質だと思いますね。家へ友達みんな呼んだり、庭でバーベキューやったり、ただ寝ころんでみたりなんかしながら、日本でもそれと同じことしても、金はかかっているし、なんかどうも日本人は誰かに質の悪い時間を押しつけられているって感じしません？僕はするんですね。みなさんも「うん」ってしてくれないと困るんですが。まあ（笑）、それはいいです。

それでですね、私は山形県の南部で生まれました。今は川西町っていう小さな町なんです。人口1万8000

人です。それでシドニーと、キャンベラ…キャンベラっていうのは、首都です、特別区です。キャンベラに…シドニーとメルボルンっていう、二つの大きな都会があって、これ仲が悪いんですね。ものすごく仲が悪くて、シドニーっていうのはだいたいイギリス本島で、政治犯とか悪いことした人が島流しになった人達が作った町という風に言われているわけです。そこでオリンピックがあったわけですけど、メルボルンっていうのはそのあとに開けたところで、これはちゃんとした移民だ、という風にメルボルンの人は言うわけです。それで、この国の首都をどこにするかというときに、シドニーとメルボルンがほとんど戦争みたいに、「ウチだウチだ！」っていう風に争ったわけです。それでとうとうそのちょうど真中に作ろうということになりました。どっちかがあると、どっちかがやめた！とか、そうになってしまうので、ちょうど定規で測って、丁度真中にキャンベラという、これは「二つの乳房」というアポリジニの言葉らしいんですけど、山が丁度二つあって、すごくいい所があるんですけど、そこに首都をつくったわけです。それで、その首都のキャンベラの計画都市です。世界中からプランを集めてアメリカの建築家がコンクールに入りまして、まだ建設中なんです。70年かかっても、まだ未完成なんです。遠大な、例えば、高速に入って車のハンドルを15度にやっつく、どこそこに行きたければ車のハンドル7度くらいに曲げておくと、そのまま、ずーっと行きながら、そこに着いちゃうっていうとんでもない計画された土地で、真中に湖があって、なぜか世界で自殺率が一番多いっていう（笑）。つまり、変な所がないんですよ。全部綺麗で、はっと曲がると飲み屋街があって、歳がいくつだかわかんないような女の人が「ちょっと〜」なんていうそんな所じゃないですからね。そういうところがないと、どうも人間はダメらしいですよ。もう全てが明朗清潔で、結局自殺者が多いっていう……僕が行った頃はそういう話でしたが、そのキャンベラとシドニーのちょうど間にゴールバーンという、やっぱり人口1万8000の市があるんです。「ああ、自分の生まれた町と、ここの人口は同じだな」と思います。シドニーからキャンベラにバスで4時間くらいかかるんですけど、バスで2時間でちょうど真中のそのゴールバーンという所に着いて、そこでちょっとバスも休憩します。あそこの名物はミートパイという、小さな……日本で言うと饅頭でしょうね。餡子の代わりにミートスパゲ

ティに、なんか肉を。こう……よくわかりませんが、そういうのが入っていて、あったかい出来たてをみんなで食べながら、あそこの名物はシードルという林檎酒ですから、それを飲んで、30分くらい休んでまたシドニーに行きます。そこがちょうど、人口が僕の生まれた町と同じだと言うんで、行く度にそこで降りて、一晩泊まったりして色々調べてみました。川西町という、山形県の南部の小さな町と、そのゴールバーンというのが同じ町なのですね、65歳以上の人が、これ昭和51年(1976年)の話なので、今はちょっと違っているかも知れませんが、でもだいたいこんなもんだと思います。65歳以上の人が、川西町は3000人。1万8000人の内、3000人が65歳以上です。で、ゴールバーンっていう同じ人口の町が2700人ですね、65歳以上は。それで、訪問ヘルパーが川西町は3人ですね。ゴールバーンが150人です。訪問看護婦は、川西町が1人です。ゴールバーンは30人です。つまり今はちょっと様子が違っているかも知れませんが、訪問ヘルパーは。川西町の場合は、これでは川西町がすごく悪者になってますけど、これ日本のどんな町にも当てはまるわけですよ。みんな横並びでやっていますから。あの町がこれで、これだったらうちもこれだ。なんてなことやっていますからね。つまり訪問ヘルパーは川西町は1000人に1人なのに、ゴールドバーンでは18人に1人なんですね。それから訪問看護婦、1人しかいませんから3000人の65歳以上の老人が3000人いるところに看護婦1人ですから、3000人に1人ですよ。ところがゴールドバーンでは30人いますから、90人に1人訪問看護婦がいると。それで、これでも足りないって言うてるんですね。3000人に1人しか訪問看護婦がない日本の町に対して、90人に1人は訪問看護婦がいます。しかも足りないと言っているそのオーストラリアの町。これに比べると社会措置・住宅・土地とか色々なことを比べても、いかに日本人の生活の質というのが悪いかというのは、もう、みなさん感じていらっしゃると思いますし、一応、少し数字を出しましたが、こんなひどい国に質の悪い国に私たちがしてしまったんですね。我々に責任がありますね、これは。あんな首相さえやめさせることができないわけですからね(笑)。それで我々の投票無しに、また決まってしまうという、江戸時代よりひどいんじゃないでしょうか。

それで、そういうその自分たちの、自分たち……つまり世界第2位の経済大国とかなんとか言いながらた

くさん利益が上がったはずなのに、我々一人々々の国民の生活の質…これはもうほんとに粗悪もいところですね。これはもう言っちゃなんですが後進国並みでしょう。あの儲けはどこ行っちゃったんだ。僕が持っているなんていうと嬉しいんですけど(笑)、そうではないんです。どこかへ行ってしまって、そういう儲け…例えば、ビル・ゲイツっていますよね。あの昭和30年(1955年)生まれ、今年45歳でマイクロソフト社を作って…。ちょっと調べてきましたけど、資産は580億ドルといえますから、1ドル110円にしますと、6兆4000万円ですね。6兆4000万円の個人資産を持っています。立志伝中の人といえますか、20世紀最大の出世をした人という風に言われて…これシアトルという所の、シアトルマリナーズのある、あそこの出身なんです。それで、彼は、2年前、全アメリカの少数民族の高校生に奨学資金を出したんです。これは20年間続けるんですけど、毎年10億ドル、つまり1110億円、これを毎年全アメリカの少数民族、日本、つまりアジア系であるとかスペイン系であるとか、インディアン系であるとかそういう風に、WASPじゃない、白人以外の少数民族の中で高校の成績のいい生徒が全部これ引っかかるらしいんですけど、そこに1年間で1100億の奨学資金を出して、少なくとも最低20年間それを続けるっていうのを2年前に発表しました。それで今年、ビル・ゲイツは同時にシアトル市の図書館に毎年2000万ドルを寄付すると。つまり、22億円ですね。これは別にビル・ゲイツが偉いというのではなくて、向こうの資本家には、やはり資本家の倫理があるんですね。つまり自分一人で儲けたわけじゃないんです。マイクロソフト社の製品を世の中が必要としたから、売れたわけですから、これは自分が発明して考え出したんですが、それを受けてくれた社会のおかげもある。という風に考えられるわけです。それで、これほっかぶりなんかすると石なんか投げられますから、必ず向こうの大金持ち、儲けた人はカーネギーホールを作るとか、カーネギー財団を作るとか、っていう財団を作って、世間の恨みを中和するっていうか、そういうあれもあるでしょうけど、儲けたものはいったん社会に返していくのです。

ビル・ゲイツの場合を調べて申し上げましたが、シアトル市の図書館というのはこれもう世界一の図書館になりました。彼は出身のシアトルに自分の儲けをどんだんどんつぎ込んでいくわけですね。そうやっ

で地域を、自分の生まれた所を更に良くして行って、世界でいちばんいい地域にしていこうと、そういう覚悟があるわけですね。

それで、日本の資本家はそれをやっているか？

やっているところもありますよね、多少。三井記念病院とか、安田講堂とか、それからトヨタ財団とか。多少やっていますが、しかしこれほど華々しくやりませんよね。

ボランティア活動と生活の芸術化

我々の税金はどこへ行ったか。あれほど働いたのに、社会につき込まれて社会の質が良くなって行って、そこで生きている私達の生活自体も質が良くなるということは全然やって来なかったわけです。しかも、この方向を私たちが選んでしまったんですね。若い人は別として、僕らの年代から上、あるいはもうちょっと下から上ですね。昭和20年（1945年）に選挙権のあった人…という70代以上になりますか？そういう人たちがこういう国を作ってしまったんですね。その間、次々に選挙権を持っている人たちが目先の所得倍増とか、そういうものを選んできたのです。それから自分を生涯面倒見てくれるのは、昔は家だったんです。だから家を大事にしたんですが、やがて企業が自分の生涯を面倒みてくれそうだっていうんで会社、企業…自分の所属している企業に全てを自分を預けてしまって、社会というものを、地域というものを全然考えないできて、その結果これほど粗悪な自由時間を、我々は持たざるえなくなった、という風に言っても過言ではないと思います。

ですから、余暇を考える前に、私たちの普通の生活の、この時間の質の悪さというのをどうしたらいいかということが私から見ますと、大事ではないかと思えます。余暇も、結局私達の時間は全て人だらけで疲れる、金はメチャクチャかかる、帰ってくると疲れる、虚しい、ってそういう、今度はそういう巨大な産業が我々の自由時間を収奪しようとして、身構えているわけです。

ここをなんとかしないと、やっぱり余暇の、余暇社会学というのが、どうも始まらないような気がします。こんな国を愛せと言われてもちょっと無理ですよ。まあ、僕の国でもありますから愛したいんですが、やっ

ぱり外国に行ったりしますと「なんであんなに悲しい国になってしまったんだろう。」と思うのです。

それは、自分も責任があります。1億分の1くらい責任がありますから、全く手放しで、なんだあの国が、っていうことはできません。

自分の身を切るような思いで、なぜこんな国に、50年かけてこんな国になってしまったんだ。という、そういう話が、私にはあるんですね。勝手に悲しんでるって言われるとそれでおしまいなんですけど、つまり、我々の余暇の質を良くするためにはこの社会の構造を少しずつ変えていかないとダメだと、いうことになると思います。

ではそのためにどうしたらいいか？

そこで色々考えて、僕はイギリスに行つて、モリスなんていう人のことを昔読んだことを思い出して、どうもこれは手っ取り早く、ボランティアと生活の芸術化だな。という風に思い始めたんですね。

つまり例えば、オーストラリアでいいますと、電話ボックスに入りますね。そうすると電話ボックスに40ヶ国くらいで、もしこの電話の掛け方がわからなかったら、ここの番号へ電話して下さいって書いてあります。日本語で書いてある、英語で書いてある、ギリシャ語で書いてある、イタリア語でスペイン語で、ネクチャ語でゲタ語で、ゲタ語というのは、800人くらいしかしゃべる人はいませんから、800人からオーストラリアに移住する人は余りいないと思います。とにかくだいたいオーストラリアというのは複合国家ですから、だいたい40くらいの違う言葉の人達が集まって、国を作っているわけですよ。ですから移民して間もなくの人が例えば子供が急に具合が悪い、どこへ電話しよう？と言ったとき、電話ボックスに入ればそこに自分の知ってる言葉でここへ掛けろと書いてあるんです。そこへ電話するとそこは全員ボランティアです。その言葉がわかる人たちが、いつも当番に詰めていて「どうしましたか？」とその掛けてる人の国の言葉で答えてくれるわけです。それで、「子供が今ちょっと具合が悪い。どこへ連れて行ったらいいんでしょう？」と聞けば、その人が「こういう所へ行ってください。」と、「今こっちからその病院に連絡しておきます。」「そこに行くにはこういう風に行ってください。」っていうことを答えてくれます。僕も日本語で書いてあるんで試してみましたけど、やっぱり日本人で向こうに帰化した人が出てきました。色々聞いたらもちろんボ

ランティアですよ。つまり自分の余暇を自分の為だけに使うか、それからもう一度社会に戻していくかという、その社会に戻すという方向が、日本は……この頃すごく出てきましたが、ちょっと弱いですよ。つまり地域、自分の住んでいる所を、うんと質を良くすると、そこに住んでいる自分の時間の質も良くなるという。地域共同体といいますか、それがいつのまにか日本人になくなってしまったというよりも、社会の出来方が、50年かかってそれを成立させない方向へ実は進んで行ってしまっていて現状に至る、ということだろうと思います。

それから、たいていみんな退職した人は、その町にある孤児院とか、児童養護施設とか、幼児院とかで、お母さんとお父さんがいない子どもたちとか、お母さんがまた病気で、お父さんもいない、子供を引き取って、なんでしょう……精神的な親になってるんですよ、全ての人。その施設の子どもたちを、全部その町の誰かが退職した人……65歳以上のおじいさんかおばあさんが必ず面倒を見て、そうやってその地域を支えていく。つまり地域の時間をできるだけ値打ちのあるものにしていくということをやっているんです。

私たちはその訓練を受けてませんので、暇があれば仲間で行きに行ったり、その住んでる地域に自分の力を、その地域に注ぎこんで、その地域を良くしてこうとそのことをあまり訓練されてません。そこが苦手なんですけど、そういうことをやっても成立していく国ですから。日本はこの先どうなるんでしょうね。これほど他人に冷たい国……交差点で、お互いに青信号になるのを待っているとき、道を挟んで20人ずつくらい睨み合いになりますよね。あれ、ほとんど戦争ですよ。それで、鞆をしょってバーン！とぶつけてきますし、何がおもしろくないんですか？非常に、まあ僕もそういう顔しているときありますから、あんまり大きなこと言えませんが、これほど切羽詰った顔色で信号渡っている人たちというのは珍しいんじゃないですか？

それで子供たちと、つまりまだ保護のいる人たち……子供たちですね。それからこれから保護を必要とする、歳をとった人たちに、これほど冷たい国もないですよ。つまりそういう国に私たちは50年かかってしてしまったわけです。ですからそこに生まれる時間はいくら時間があっても非常に嫌な、濁った、質の悪い時間がそこへ出来てくるわけです。

ボローニアの歴史と政治

私がよく知ってる街の話しをさせて下さい。ここは、つまり、さっき言いました生活自体の、生活の時間の質を良くするためには色々な方法があると思いますけど、芸術で質を良くするという、そういうことに成功した街があるんですね。そのところを私随分調べてました。イタリアにボローニャという街があります。イタリア半島がありますよね。丁度足に例えますよね、よくね。シチリア島という島があって、あれがサッカーボールでこっちが足なんでイタリアはサッカーがとても強いんだっていう風に言う人もいます。それから膝小僧辺りがちょうどローマですけど、この足は女性の足か男性の足かという有名なナゾナゾがありまして、ずーっと足の付け根の方にベニスっていう街があって、これ発音を間違えると、これは男の足であると。イタリア人に会うと、必ずそれを言いますから、受けたふりをして下さい(笑)。ちょうど、ローマからベニスの間に、昔から、ローマ時代から、街道があるんです。その街道は山を越えます。アペニン山脈というんですけど、2000メートルくらいのたいした山脈ではないですけど、イタリアでは最大の、もちろんスイスの近所に行くともうすごい山がありますけど、半島の中では一番高い山ですね。そこを越えた道がベニスに延びているわけですね。ですからみなさんからご覧になると、こういう風に、イタリアがこうなっこう、足があって、ここにシチリアがあって、でこの膝小僧が出た辺りがローマがあって、ちょうど付け根ですね、ベニスといいますが、その辺に真っ直ぐ街道があります。それで、アペニン山脈を越えたところからイタリアで最大の平野が広がります。ポウ川というのが流れていまして、そのポウ川の流域ポウ平野っていうんですか？ここは米なんかも獲れる所ですが、ボローニャというのは、そういうローマ時代以前から今度はミラノの方と南イタリアに行く、あるいはアドリア海の都市からミラノやフランスへ行く、丁度交差点なんですけど、交通の要所なんです。それで農産物の集積でまず街が出来て、宿場町でもありますよね。そうやってずーっと発展してきた街ですが、19世紀くらいからは、精密機械を作る工場なんかも出来て、なかなかおもしろい街です。それで、ヨーロッパでいちばん古い大学がここに出来ます。ボローニャ大学は1088年にできました。ボローニャ大学…これ、ヨーロッパでいちばん古い

です。それでこの大学の出来方はですね、生徒たちが組合を作るんですね。個人教授で、あるいは修道院に行き勉強を教わるんですが、どうも先生のレベルがでこぼこだったり、月謝をある先生は多く取るし、ある先生は安いのです。それで教わっている若い生徒たちが組合を作って、その組合学校へ先生を呼ぼうとしたのです。そうすると、いい先生が来てくれるだろうし、怠ける先生は我々組合員が排除できます。これがつまりボローニャ大学の始まりです。それで、こういう商業の要衝地ですから、ここに商法とか、法律の学問が発達していくんですね。ちょっと遅れて今度はパリ大学というのができます。これは先生方の組合です。個人教授の先生たちが、どうも生徒たちが月謝を払ったり払わなかったりするの、これはまとめる必要があると教師が作ったのがパリ大学ですね。ハーバード大学というのは、ある牧師が残した本を街が遺言で預かって、それを分類して読み方を勉強したりしている内に、やがて自然にそれが大学を成して行って、ハーバード大学になりますよね。日本の大学はご存知のように私立は別として、官学は政府の役人を育てるために、政府が作るわけです。ですから、大学のスタートでもだいぶ違います。はっきり言って、東大の卒業生はかなり眉唾つけないと半分くらいは、みんな役人になるために養成されているわけですから。まあ他の大学の悪口はよしましょう。ただ、日本の官学はそういうお上の声がかかりで出来たのです。ボローニャ大学は生徒たちが組合を作って、先生を迎えて大学の形態を作って、それが1088年に色々総合されて、つまり結ばれてボローニャ大学になるわけですね。それでここは法律学の世界的中心です。

さっき言いましたが、18世紀に色々な機械工場が出来ますんで、工業大学がたくさん出来ています。人口はだいたい50万です。日本でいうと、どうでしょうね。山形よりもちょっと大きいくらいですかね。仙台よりは小さいですね。日本で50万というたいした都市じゃないではないですけど、その人口が50万ある、ボローニャのマニャ県とかいう県の首都……ここまでが前説なんですけど、ここは第2次世界大戦でこてんぱんに戦場になって、メチャクチャになったんですよ。それで戦争が終わった後に、その市の市議会と市長が共産党だったんですよ。当時共産党……。イタリアって不思議な国で、カトリック信者が90パーセントいるんですけど、その頃投票すると、50パーセントが共産

党に入れていたんですよ。誰かずるしているんですよ。

生きている間は共産党で行こうという人が大勢いたと思うんですね。社会主義ですね、要するに。それで、ヨーロッパ中が廃墟みたいになりますから、有名なハーバード大学で当時のマーシャル国務長官っていう人が、だいたい向こうの政治家っていうのはアメリカの政治家も、イギリスの政治家もみんなそうですけど、重要な政策は大学で発表するんです。つまり大学にはこれからこの国を作っていくエリート若い青年たちがいっぱいいるわけですから、その大学を自分で選んで、自分の選んだ大学の何かの式典にかこつけて、これからこういう政策をするっていうので、学生たちの反応を見るわけです。マーシャル国務長官もハーバードの卒業式に来賓として招かれて、そこでスピーチをします。そのスピーチの内容は、「我々はすべてヨーロッパの移民である。」と、「ヨーロッパは今度の戦争で大変にやられてしまった。」と、「この復興に手を貸すのは、つまり我々の先祖に対する礼儀ではないか。」という演説をするんですね。それで大拍手で、それがその当時のアメリカ政府の政策になります。それで、ご存知の「マーシャルプラン」というのが始まるわけですね。

それで、ヨーロッパにたいへんな援助資金がアメリカから流れ込むんです。アメリカもちろん計算しています。そうやってお金や物をヨーロッパに流すことによって、それを安く売ったり、アメリカで出来た商品をヨーロッパで売るという目的もありますし、それからぐずぐずしていると共産党が強かったですから、ヨーロッパが赤くなってしまうんじゃないかという恐れもあって、早くヨーロッパにお金を注ぎ込んで、アメリカの力でヨーロッパを建て直そうと、そういう色々な外交も兼ねて、そのマーシャルプランがヨーロッパの各国へ流れ込んだんですね。イタリアにももちろんアメリカから膨大な援助資金が来ました。そのときに、当時のイタリアの中央政府の首相は、ちょうどキリスト教民主党という、日本で言うところの自民党みたいな保守政党は中央政府なんですよ。それで共産主義の侵入を防ぐ意味もあるんで、ボローニャにはもう共産主義が入ってる、社会主義が入ってるなんていう所にはお金は出さないよ、ってうっかり言っちゃたんですね。

ポローニアの街づくりと市民

ポローニャ市の市会議員の選挙が間近だったんです。それで、ポローニャ市民にお金が欲しかったら、今度の投票でキリスト教民主党に入れなさいよ、という風ななぞをかけたんですけれど、ポローニャ市民はものすごく怒ったんですね。そんな金は要らないと、その代わり、これから我々がやることに政府はいっさい口出ししないで欲しいということで、有名な五つの町の憲章を作るわけです。もう国と縁を切っちゃったんです。国が金を出すから口を出すというのをやめさせたんです。金は要らない。我々が投票で選んだ自治体の政府といいますか、それが気に入らなくて、金をよこさないとかよこすとか言うんだらそんな金は要りませんと。その代わり今後ポローニャ市、及びその県です、ローマニャ県については我々が勝手にやるんで、いっさい口出ししないで欲しいと言う風にみんなで決めまして、それで5つのことを決めるんです。1つ目はですね、投機としての土地の売買は禁止する。よんどころなく引越したりなんかする場合はもちろんそれはしょうがないですが、金儲けのために土地や建物を売買するのはいっさい禁止する。これは大変な禁じ手を、自分達にはめたわけですね。もし売買が後で調べて投機のためと分かったら、その利益は全部市が没収する、ということを決めたわけです。次にその土地の売買、よんどころない売買であっても、市の政府に先売権があると、つまり先に買う権利が市側にあります。ある所が、よんどころない理由である場所が売りに出て、Aさんがそこを買うというその時に、市政府が、市役所が、そこは公園にしたいと思って市も買うよ、と言った場合には、必ず市に売らないといけなわけですね。そういう先売権というのを、市に市民達が与えたわけです。それから3番目に用途制限です。街の中心にある旧市街の歴史的建造物は完全に保存する。と、これはヨーロッパでは当り前のことなんです。そして、郊外の緑地を保全すると。更に、これがユニークなんですけど、機械工業のまた街ですから、農業の集散地、学問の町、5人に1人は学生がいる、学生のたくさんいる街なんですけど、同時にここは機械工業、精密機械工業の町で、この工場が従業員が300人以上になった場合は、必ずそれを枝分かれさせていくことにしました。工場を大きくしないのです。郊外に四角い箱なんか建っちゃだめです。これは、具

体的に後で説明します。300人以上の、つまりある程度工場が流行って、大きくなったらそのまま大きくしたらダメなのです。これも後で詳しく説明します。それと4番目は直接民主主義と、間接民主主義を併用することにしました。どういうことかといいますと、普通に選挙で市長や市会議員を選ぶんですが同時に人口45万…当時45万ですけど、そこを19の区に分けるわけですね。これ「クワルティエーレ (quartiere)」というんですけど、区画という意味ですよ。それで、ここを全部評議会にして、住民がだいたい、そうですね1万9000から2万人くらいの単位に19に分けて、そこに住民が代わる代わるボランティアでその評議委員になるわけです。21人くらいで。それでその区域のことを一生懸命に考えて、それぞれがこの区域のこれをこうして欲しいということを今度は、評議連絡会と言う所に出すわけです。これを「クワルティエーリ」という1つの機関で、19に分けた所で、色々その場所での色々な問題をもう1つ上上げていくわけです。それで、その連絡会がそれをまとめて、市議会や市長に出した場合にはそれがいちばん優先するんです。

つまり選挙である市長を選んで、最初の1年くらいは良かったけど、後はなんだかかわかんない ということを補うために直接制も入れているわけです。だから間接民主主義と直接民主主義を併用しているわけです。それで、当然市議会や市長はボランティアです。給料は実費だけです。議会はすべて夜です。これは一般市民が参加できるように市議会は夜の間開かれる。だから、市長も市議会も昼間はちゃんと自分の仕事を持っているわけです。議会で生活を立てるということは全然考えないボランティアです。それで議会、それからそういう委員会はすべて夜、ですから市民はどんどん参加していくと、そういう形態をこのとき取ったわけですね。それで5番目がいちばん大事なんですけども、これから我々だけでこの廃墟みたいな街を復興させるにはどうしても女性に働いてもらわないといけな。ということで、いちばん最初にやったのは、女性が働けるような保育園や、それから学童保育なんてありますが、とにかく、女の人たちが子供を預けて5時まで働いて帰ってきたときまで、子供が安全な生活を送っているようなことをまず最初に市が始めるんですね。ポローニャに行ってみるとわかりまけど、郵便局長やら銀行の支店長なんか全部女性です。男性は何をし

ているかという、バリ島みたいにニワトリを戦わせている……て、そういうんじゃないんですよね。全部、地下に潜っている。別にほんとに地下に潜っているわけじゃないんですが、さっきの工場の例で言いますと、これ名古屋大学の佐々木雅幸先生といったポーロニャの専門家で、その方から教わったんですが、1924年にACMAっていうアクマっていうですね、包装機械の工場があったんですね。ホウソウ機械っていうのは物を包むんですね、機械です。キャラメルが出来てくるのを機械が紙で包んでいく、そういう物を包む機械の会社がありまして、さっきも言いましたように、これはどんどん大きくなるわけです。すごく質のいい、精密工業地帯ですから大きくなっていく、イタリア政府は意地悪して、全然ここになんにも注文してこないですね。イタリア政府はわざわざ他の所へ注文する、外国まで注文して、ここをシカトするわけです。その物は、おまえら縁を切ったんだから金戻さないかぎり、おまえたちの作る物はいっさい買わないぞ。って、意地悪をずーっとするんですが、このアクマっていう会社が大きくなって、300人以上の従業員になってくると、これ工場大きくできないんですよ。最初に決めた市民憲章のせいで。

どうなるかといいますと、このアクマの基本技術はそっくり引き継いで9人以上の人たちが集まると組合が作れるのです。組合都市ですから、組合を作って、この技術はそっくり親会社のをもらうんです。しかし、同じ製品は作らないんですね。そうしてくると、固形スープの素の包装を例えば、ホラツアっていう会社が始めるわけです、9人で。アクマっていう工場が大きくなって300人も超えそうだっていう時に、その中で9人ぐらいが、同志が集まって別の組合会社を作って、親会社の物を包む機械の原理はそっくりいただきながら、違う機械を作っていくわけです。固形スープの素の包装をホラツアというのが1952年に作りますね。ここが大きくなるんです。そうすると、グランディっていう避妊具包装会社を1970年に作るわけです。固形スープの素の包装会社がまた大きくなったので、その中の有志が……どういう有志かわかりませんが、コンドームを包む機械の会社を始めるわけですね。

それからホラツアという会社はまた分かれて、ゼロハン包装とか、物を包む原理を利用しながら、対象を違えてどんどん網の目みたいに広がるのです。結局このアクマっていう1924年に出来た精密包装機械会社

のネットワークは今35社くらいあるわけです。それが全部ポーロニャの街の中にあるわけです。

かつて、ポーロニャというのは、イタリアで一番貧しい街だったんですね。全然政府から援助が来ませんから 貧しかったんですが、1970年代の始まりくらいには、イタリアでいちばん実入りのいい、収入のいいベスト3に入ってきたんです。今投票しますとポーロニャに住みたいって言う人が圧倒的に多いんですよ。

文化あふるる街ポーロニア

市民の収入が良くなってきて、市の儲けとして一時期みんな税金を40パーセントくらい納めていたと思うんです。そうやって町の壊れた所を修復して、ずーっと整備していくと、最初にポーロニャ歌劇場というのがすごい評判を取りだすんですね。ミラノのスカラ座よりちょっといいっていうような感じになって、段々おらが町の自慢というのが少しずつ出てきて、あるときですね、クワルティーエルという19の評議会が一致したのは、我々ポーロニャ市民の思想や生活感情やすべてを何かで表現したいと。そして、何がいいだろうというので演劇にしよう、芝居にしよう、と決めるわけです。そして、ローマで若い演劇人がいたんですね。役者で作者で演出家で、なんかドタバタでおもしろいことやっているダリオ・フォーっていう若い劇作家、演出家、俳優を日本でいうと誰でしょうね？ 明治大学出身の唐十郎さんをもっとわかり易くして、明るくしたような(笑)、若い演劇人がいたのです。それをポーロニャに引き抜いてくるわけです。

それで、彼にこの市民の意識を芝居にして欲しいと頼みます。

町の歴史的建造物なんかのいいところの内部を、外は変えませんが、中を劇場にして、自由なことをやらせたわけですね。

彼がやったのはドタバタ喜劇です。

このポーロニャの人っていうのは、ローマ中央政府にはもう一触即発の戦争状態ですから、自分のところの製品も買ってくれなければ……元々は自分たちがやったことなんです、それで、このダリオ・フォーという人は、その中央政府の批判をコントにするわけですね。15分くらいのコントを1日4本くらい作るわけです。

込むんです。「行ってらっしゃい。お父さんとお母さんは、ここが終わったらちゃんと迎えに出てるからね。」って、それで、お父さんとお母さんは、隣の大人の劇場に入るわけですが、必ず大人の劇場の方が早く終わるようになってるんです。出てきて待っていると、この児童劇場の中では人形劇を二つ分けたり、おやつや、歌の何かっていうんで、プログラムを組んで必ず大人の劇場より遅く終わるようにしてあるわけです。ですから子供の立場から見ると、お父さんお母さんに、今日は楽しんでらっしゃいってという風に送り込まれて、終わって「あぁ～、おもしろかった！」って出てくると、お父さんお母さんが待っているわけです。そういう風に、もう演劇都市として、もう徹底したわけです。

それで、同時にさっき言いましたが、ボローニャ歌劇場というのは、今はミラノを完全に追いついて、行って見ますと、世界一の歌劇場になりました。そうやって街全体が変わって、イタリアの人、それからヨーロッパの人はみんなアンケート取るとボローニャに住みたいと言うようになったのです。老後はボローニャに行きたいという声が圧倒的に多いのです。

今ボローニャというのは、収入はイタリアで一番ですよ。非常に豊かな県になって、中央政府と依然として口を聞いてないですけど。そういう機会から何が始まるかといいますと、この間おもしろいと思いましたが、スピルバーグがロサンゼルスに黒澤明の専門映画館を作る、ということになりましたよね。もう去年くらいです。

とにかく、スピルバーグもルーカスもみんな黒澤明が好きで、黒澤明で映画のおもしろさを知って、何回も見て、「スターウォーズ」なんて「隠し砦の三悪人」ですよ。ジェダイというのが出てきますけど、あれ、時代劇のジダイですから、英語風に言うと「ジェダイ」になっちゃって。それで、黒澤明の映画をロサンゼルスの人達が毎日見れるようにしたいというので、自分達で映画館を作って……日本の映画界はやらないでしょ？ そんな、いくら儲かっても。儲かった時代あったんですから。スピルバーグが東宝から黒澤明のフィルムを送ってもらうときに、実はボローニャを通過してくるんですよ。ボローニャはそういう精密機械の本場ですから、若い人たちがおもしろ半分古い映画の修復をしているうちに、世界一のフィルム修復センターが出来ちゃったんです。キネテカっていう会社が出来て、だから世界中の無声映画とか、ボロボロの映

画が全部ボローニャに運ばれて、そこできちっとした物にもう一度修理し直して、それで黒澤さんの映画の場合は、そこからロサンゼルススピルバーグの映画館に行くのです。

また、ボローニャは世界一の義手義足センターなんです。義手や義足をここで注文すると、そんなに高くないんです。最高のものがここで出来てきます。そうやって精密機械が色々な枝分かれをしながら、そのボローニャの街の中には実はネットワークであって、しかもこれ学問の街で学生さんが9万人もいて、人口50万の中に9万人も学生さんがいて、更に農業の集散地で、ボローニャのスパゲッティなんかもあるでしょ？ ミートソースなんかあそこですすね。まあ食べ物うまい所です。

それで、そうやってそこの値打ちが上がっていく。結局はボローニャに住んでることが、つまり、その人にとっては誇りなわけですよ。わざわざ出掛けて行く必要ないわけですね。だからビル・ゲイツもシアトルにたくさん寄付をして、奨学資金もそうです。勉強しようという高校生、大学に行く間ちょっと2、3ヶ月勉強しようなんてそういう施設も全部シアトルに建てて行って、結局自分たちの生まれた所、あるいは縁あって住み着いた所をみんなでお金のある人はお金を出し合って、それから金が無くても、時間のある人はそこに自分の労働力をそこへつぎ込んで、自分たちの所をうんと良くしていくわけです。そうして行って、つまり余暇の時間をそこにいるだけで、すごく質のいい余暇の時間をそこで創造できるような装置を作っていくわけですよ。わざわざ余暇だって言って、汽車に乗ってどこかへ行って、みんなにもまれて疲れて帰って来る、金も使って帰って来る、そういうんじゃない、自分たちのいる所の生活の質をうんと向上させて、おもしろい、楽しい、そういういい街にして行って、そこに住んでいること自体が、生活と同時に余暇が同時にあって、他の人たちがそこへ実は、休みを過ごしに来るみたいな、そういう逆転した考え方を作っていくわけです。これは私たちはちょっと勉強してもいいんじゃないかな。と思いますね。

結 び

「青い鳥」じゃないですが、余暇をつぶすために、

消費するために、どこかよそへ行って、巨大企業の装置の中へはまっっていく、という方向も、もちろんたまにはいいでしょうが、そうではなくて、自分たちの住んでいる所の生活の質、生活の時間が非常に良質で、そこにいるだけで楽しい。サッカーとか野球も全部そうです。フランチャイズっていうのは全部そうですよね。俺たちの街が世界でいちばんだ。宇宙でいちばんいい街なんだ。っていう風にみんな思っているからそのチームを応援するわけです。アメリカのプロ野球なんかもそうですよね。市民たちが一生懸命応援していく。それもまあ一種の余暇、余暇の過ごし方ですね。とにかく自分達がパトロンになって劇団も持つ、オペラ団も持つ、劇場も持つ、サッカーチームも持つ、

野球チームも持つ、それで楽しみ事も起きますし、そこで生きてること自体が楽しい。という風にしていくのが実は最終の目標ではないでしょうか。今の日本人のように、余暇はあちこちに移動して行って疲れて帰って来るレジャーの有り方というのは、結局は大きな資本に自分たちの大事な時間を吸い取られて、非常に質の悪い時間を過ごしているというような気がして仕方がありません。

ということで、今日の話はおしまいであります。これからも、先生方と協力して、色々なことをみなさんと考えたいと思いますので、ひとつよろしくお願ひします。どうぞご清聴ありがとうございました。

(文責 編集委員会)